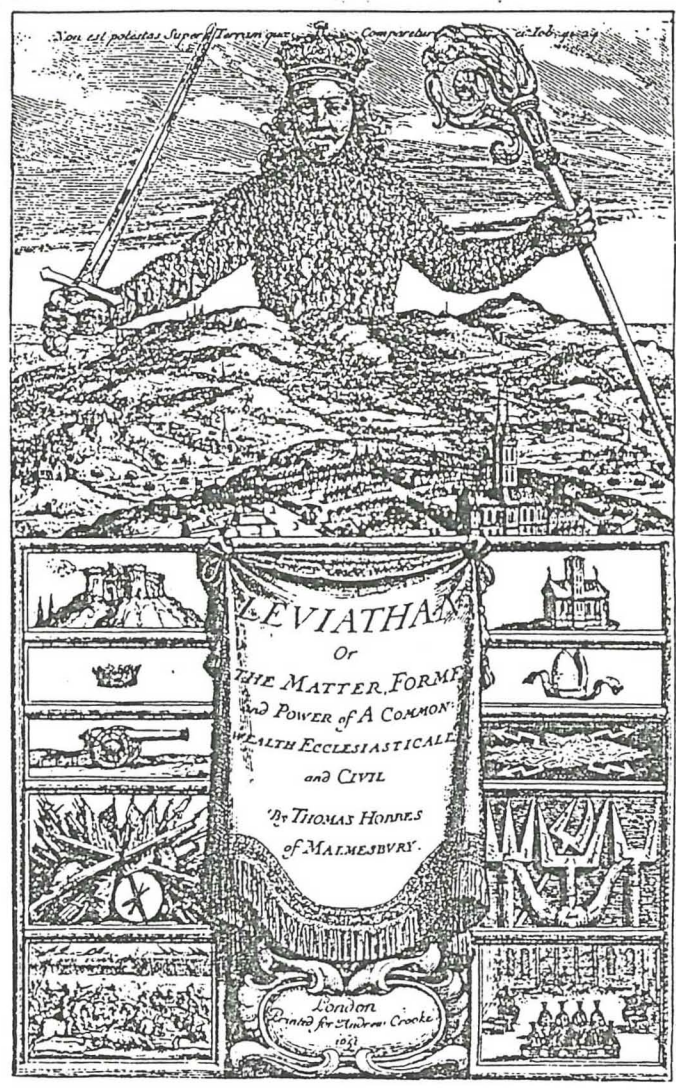


国家というフイクンションが崩れる時 世界は巨大な地殻変動を始める!



かつて、資本主義経済の登場によって国民国家が生まれ、「近代」が誕生した。しかしその「近代」は、資本主義の高度化と国民国家の動揺によって、大きな曲がり角にさしかかっている!

橋爪大三郎 (東京工業大学助教授)

——ベルリンの壁崩壊に始まり、冷戦が

終わって全ヨーロッパがECに入ろうとし、それどころかアメリカン連同盟までできそうなムードの現在、そういった国家間の「統合」の動きの一方で、まったく逆の「分離」という動きが出ています。チェコからスロヴァキアが、イギリスからスコットランドが独立しようとし、カナダにはイヌイット(エスキモー)の自治領もできるという

ます。国家の統合と、民族独立はどうして同時に起こってきているのでしょうか? 橋爪 まず、国家とひと口に言いますが、いったいどういう国家のことを指しているのか? 王国、帝国、共和国、自治州など

といろいろあって、英語などでも別々の単語で表わされる。字引を引いて、国家stateみたいな覚えませうけれど、でもアメリカの「州」もステートでしょう? ——でも、あれを僕らの基準では「国家」とは呼ばないですね。

橋爪 じゃあ、「国家」と呼べるためには、どんな要素が必要だと思いますか?

——まず、他国から独立した政府。それを支える軍隊や警察などの権力機構、法律

……。 橋爪 それ以前に、もっと大事なものがあ

るでしょう。 ——といいますと? 橋爪 国土。それに国民です。この二つを

具えているという条件にぴったり当てはまる国家とは、十七、八世紀以降のヨーロッパに成立した「近代国民国家」のことなんです。 ——それ以前の国家には国民とか国土

という要素はなかったんですか? 橋爪 そう考えていい。順を追って説明しますが、とにかく「近代国家」の最大の特徴は、国民と国土。つまり、人間のまとまりを、国境という線で人為的、排他的に区切っていくことなんです。フランス国民だったらイギリス国民じゃない。イギリス国民だったらフランス国民じゃない。重複したり、あいまいだったりはいけません。これを数学では「直和分割」と言いますが、要す

るに近代の国民国家とは、人間のグループを地図上の線引きで区分けできるという前提に従っているんです。それを背後で支えているのが、「同じ民族」はひとつに集まって国家を作るんだ」という思想です。

ところがここに、国民国家の最大の矛盾も潜んでいた。 ——その国境内に住むからといって、同じ民族だとは限らないですよ。 橋爪 そうです。だから目下、世界各地で

続発している民族問題は、近代以降ずっと続いてきた国民国家の体制の矛盾が噴出したものである、と言ってもいいのです。 国家と国民。それらの確執について考える

ものには、少し歴史を振り返って、国家そのものの成り立ちについて整理しておいたほうがいいでしょう。

「帝国」は、単なる「大きな国」ではない

橋爪 国家は、人びとを政治的に統合する単位のひとつです。

政治的統合のもっとも小さな単位を考え
てみると、「リニジ(系族)」というのがあ
る。これは、親、兄弟が血のつながりによ
って結びついたもの。また、村というもの
もある。村では、人びと全員が緊密に関わ
りあって暮らしていて、互いが互いのこと
をよく知っていて助けあう。こういうのを
「共同体」といいます。この場合、人びとを
結びつけているのは、日常の接触です。

つぎに、こういう段階を越える、第二段
階の統合として、たとえば「部族」という
のがある。リニジは実際に血のつながりが
たどれる人びとの集まりですが、部族の場
合は、単に共通の祖先を持つと信じられて
いるだけ。伝説や神話によって、いくつも
のリニジが結びついたものです。これを、
首長とか酋長といわれるリーダーが統率し
ます。現在でも、この段階の統合を出てい
ない社会もあって、たとえばアフリカ。部
族対立が激しくて、国家が機能していない
のですが、彼らは部族を越える段階の統合
を信頼していません。日本の古代に

あった豪族というのも、おそらく部族みた
いなものでしょう。物部氏とか、渡来系の
蘇我氏とか、それぞれが兵隊をかかえて跋
扈していた。

さて、部族同士が戦争のとき、共同戦線
を張って連合したり、強力な一部族が他の
部族を併合したりするうちに、だんだん大
きなまとまりになってきます。ここでやっ
と「国」らしきものができてくる。これが
古代国家ですが、古代の国家はたいがい
王国です。王は、世襲によって子どもに権
力を引き継ぐことができます。そういうひ
とりの王様が、いくつもの部族の長のうえ
に立つ。そして、いくつもの部族をまとめ
る概念として、「民族」にあたる概念も生ま
れてきます。

——ダビデ王とユダヤ民族の関係みたい
なものですね。ダビデに統一されたユダヤ
王国の十二部族の始祖はみんなヤコブの息
子ということになっている。

橋爪 そうですね。

そうしたいくつもの王国が、もっと大き

が試みた方法。どんどん植民や混血を進め、
人種も文化も混ぜこぜにしてしまおう。ヘレ
ニズム文化による統合というこの方法は、
後世に大きな影響を残しましたが、帝国を
のものはすぐ解体してしまっただけ。

ローマ帝国が使った方法は、法律でした。
ローマは、ローマ人以外のよその民族にも
通用する「万民法」というものを考え、そ
れを基礎に帝国を統治しました。ローマの
法を尊重すれば、各民族は、自分たちの文
化や宗教、王様を持ったままでもいいとし
たのです。

——聖書に出てくるヘロデ王などはロー
マ帝国内のユダヤの王でしたね。

橋爪 そうです。ユダヤ民族は、支配者で
ある王様と取引して、自治を認めてもら
いました。自治とは具体的にいうと、ユダ
ヤ教を信仰する自由と、ユダヤの法律にも
とづく裁判権ですね。その代わり、支配者
に税金を納める。また、戦争が始まれば、
決められた人数の兵隊を出し、自分たちに
関係ない戦場に行く。

——ローマに征服されてもローマ国民に
されるわけではないんですね。

橋爪 国籍とか国民とかいう観念が生まれ
るのは、近代国家成立以降です。

ローマ帝国の場合には、市民権というも
のがありました。市民権さえあれば、ロー
マ人でなくてもローマのメンバーとして認
められるのです。

中国は帝国を維持するために、また別の
方法を使いました。

中国には独特の官僚制があります。官僚
になれるのはどういう人かという、儒学
の知識があるということ。漢字が読み書き
できて、儒教の古典に通じていけば、何民
族の出身であろうと官僚になれる。という
より、儒教文化を受け入れれば、漢族、つ
まり中国人になれる。遺伝子分析をしでみ
ると、漢民族といっても北方と南方では非
常に差があつて、日本人と中国人の差より
大きいくらいだといえます。それでも彼ら
は、中国人であるという一体感を持つてい
る。数千年にもわたり、ひとつの文化圏で

くまとまっています。ひとつの王国が、
ほかの王国をみんな征服してしまうことは
よくある。こうしてできあがつた、王国を
越える統合を「帝国」といいます。帝国の
首長を「皇帝」と呼びますが、これは国王
より上位の存在です。帝国の内部にはいく
つもの異なった王国、つまり異なった民族
や宗教が存在しているのです。皇帝は、王
様が成り上がる場合が多いのですが、ロー
マ帝国では原則として、民衆によって選ば
れたということになっている点が変わって
いました。

帝国を維持する いくつもの方法

帝国では、さまざまな王国や民族を統治
するための戦略が必要になってきます。ひ
とつには、もともと武力によって征服した
わけだから、軍事的な支配を続ける、とい
う方針があります。モンゴル帝国がそうで
すが、きわめて不安定。もうひとつは、ロ
ーマよりもっと昔に、アレクサンダー大王

あることをつねづね確認してきたからです。
中国人というのは人種である以上に文化的
まとまりだから、非常に人数が多いのです。

——「帝国」には異なる民族を統合するた
めのいろいろな古典的方法があるんですね。
でも、僕たちには大日本帝国のイメージが
あるから、帝国という言葉にすごく抑圧的
なものを感ずるんですけど。

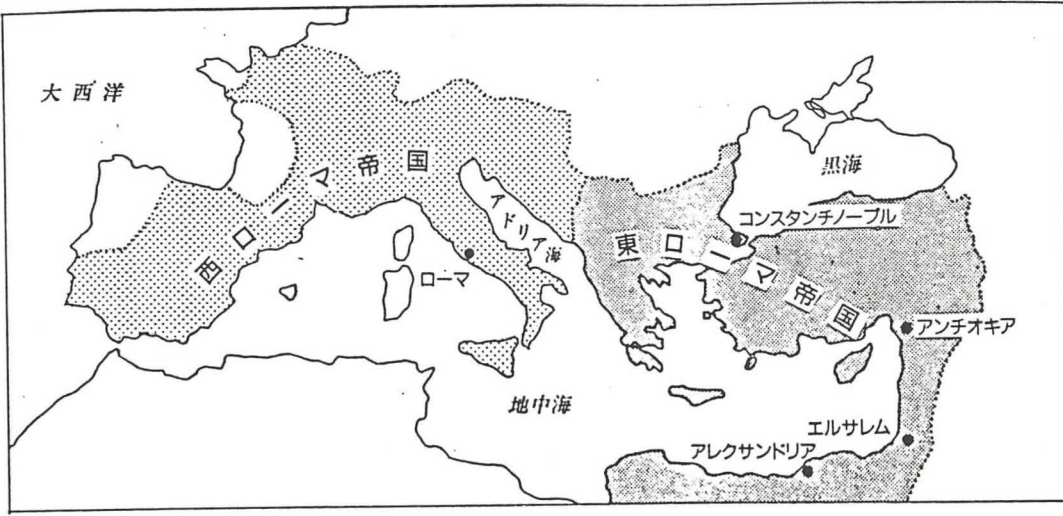
橋爪 日本人は「帝国」というものが、ゼ
ンぜんわかっていないのです。だから周辺
諸国にひどいことをしてしまつた。帝国の
あり方を理解しないから、異文化、異民族
の扱い方を知らないわけです。

大英帝国など、原地文化には手をつけな
いのが原則で、植民地における宗教の自由
固有文化、生活習慣、そういうものは尊重
した。日本が朝鮮でやった「創氏改名」み
たいな無茶はやらない。あとていいますが、
イスラム帝国も、信教の自由は認めている。
税金を納め、統治に歯向かわなければ、キ
リスト教やユダヤ教を信仰してもいいん
です。

ローマ・カトリックが
ECCを成立させた

橋爪 国民国家の起源をさぐるために、ローマ帝国に話を戻しましょう。
ローマ帝国はその後、東西に分裂してしまいました。キリスト教の力を借りて別なカタチで蘇ります。

ローマ帝国が分裂しそうになっていたころ、主要な五大都市にキリスト教会のリーダー、つまり総主教がいました。五大都市とは、ローマ、コンスタンチノーブル、アンチオキア、アレクサンドリア、エルサレムです。彼らはキリスト教会を指導する立場にありましたが、本当に大事なことは主教会議で決定するのが原則でした。『聖書』には、教会の運営方法や教義の解釈など、細かいことが書いてないので、統一見解を出す必要があったのです。ところがまもなく、五大都市のうち三つは尻すぼみになってしまつて、ローマとコンスタンチノーブルだけが残り残りました。



さて、西ローマ帝国は五世紀の後半に滅ばされてしまい、ゲルマン人の国家が乱立します。なかでも強力だったのが、いまのドイツとフランスにまたがるフランク王国でした。そこでローマ教会は、フランク王国の王をローマ皇帝の後継者とし、ゲルマン人によって西ローマ帝国を再興させようとしています。これが神聖ローマ帝国になるわけです。

でも、東ローマ帝国(ビザンチン)にも総主教がいたんですね。
橋爪 東西の総主教は、だんだん連絡が疎遠になって、教義上の喰い違いも調整できず、ついにはお互いに相手を破門しあつて、喧嘩別れしてしまいました。これがローマのカトリック教会と、東方正教会の分離ですね。そして、五大総主教のひとつにすぎなかったローマの総主教が、教皇(法王)を名乗り、自分はずべてのキリスト教徒のリーダーであるという顔をするようになる。現在まで続く「西欧」の観念、つまり狭義のヨーロッパとは、このローマ教皇の影響下

にある地域のことなのです。
——異民族であるゲルマン人がなぜローマ法王に従つたのでしょうか。

橋爪 ローマ教会の特徴は、民族を問わない普遍主義にあります。たとえばゲルマン人と言っても、アングロ・サクソンとかフランクとかいろいろあるでしょ。ローマ教会は彼らを改宗させました。そして布教の際に、ヨーロッパ共通の儀礼、共通の言語を崩さなかつたのです。『聖書』もミサに使う言語も宗教改革まではローマの言語、つまりラテン語だった。だからヨーロッパは、文化を共有する一つの文化圏になりました。そしてローマ教皇は、西欧全体の唯一無二の中心であり続けたのです。ヨーロッパ共同体(ECC)は、こうした文化的背景を基盤にしているのです。

それに対して、東方正教会はどうだったか。彼らも周辺のブルガリアやスラブなどに布教していきましたが、ビザンチン帝国が縮小していくと同時に各地の教会がバラバラに独立していきました。たとえばロシ

ア正教会は最近千年祭をやつたのですが、それだけの歴史がある。独立するということとは、その教会に総主教が立つて、ビザンチンの指導を離れるということ。当然ローマ教皇のような、権力の一極集中はない。典礼にもその土地その民族の言葉を使うし、儀礼のやり方もそれぞれ独特です。つまり東方正教会は、民族というものに妥協してしまつたのです。だから東欧では、ECCのようなものができにくい。民族対立がいつまでも尾をひいている背後には、こういう要因があります。

イスラムの統一力

橋爪 宗教で統合された帝国としては、ローマよりもっと強固なものとして、イスラム帝国があります。

ムハンマドが生まれた頃のアラビアは、部族同士の対立が激しく、宗教的にも混乱をきわめていました。そんなとき、彼は、唯一の神のもとに宗教共同体を作つて世界

を統一せよとの啓示を、神から直接受けるのです。その啓示をまとめたのが『コーラン』です。これはアラビア語で書かれてい

るんだけど、神の言葉だから一字一句修正を許されない。翻訳や解釈も禁じられていたため、アラビア語がイスラム圏の共通語になつた。ここがポイントですが、ムハンマドはキリスト教が教典の解釈をめぐつて分裂していった事情を知つていたわけです。また、ユダヤ教やキリスト教の『聖書』には儀式のやり方も書いてなくて論争の種になるので、ムハンマド(というか、アッラ

シヤ人もトルコ人もインド人もいろいろいるんだけれど、これで統一できてしまう。どの民族も、イスラムの教えを信じる限り同胞である。将来は、世界全体がひとつのイスラム共同体(ウンマ)になって、地上にひとつの神の王国が完成されるのが彼らの理想なんです。

——それなら国家なんてものは必要ないですね。

「国民がいないと国家が困る」

橋爪 では、なぜヨーロッパには国家、つまり国民国家ができたのか、その過程について考えましょう。

ヨーロッパの中世にも国家みたいなものはありましたが、それは、たくさん領主たちの所有する領地の寄せ集めにすぎなかった。その領主たちをまとめる国王もいたけど、王の権限は、領主を飛び越えて領民に直接およぶものではなかった。だから一般の農民は、自分は誰々の領地の農民であ

るという意識はあっても、城壁に囲まれた都市はひとつひとつが独立した国みたいなものだったから、自分はどここの町の市民だとは思っても、国民だとは考えない。これが封建時代ですね。一生その土地を離れないで死んでいくという、自給自足の時代だったから、これでもまあよかったです。

ところが、毛織物のような工業製品を作って、それを市場で取引するようにになると、事情が変わってくる。まず、各地の領主が特権をかさに流通の邪魔をしたのでは、商品流通が阻害される。これを撤廃して、大きな範囲の自由市場経済圏をつくるために国王の力が強くなって、領主の権限を圧倒することが望まれるわけです。また、市場経済を発展させるためには、外部からの輸入を制限することも必要になる。関税を徴収して、国王ができかけの市場経済を保護したりする。そのための線引きとして、きっちりした国境を決め、その枠のなかだけでの発展を目指す。——要するに国境というものは、資本主義経済の発達につれて、

必要になったんです。

関税は国王の財源にもなります。こうした経済力をバックにして国王は、領主たちや教会権力に対して闘いを挑んでいく。中世の網の目のような権力構造を一元化して、軍事・立法・外交といった権限を「国家」が独占するための闘いです。

さて、「国家」としては、封建制度を打倒するために、自己の主張を正当化しなければならぬ。そこで「同一の文化を持つ人びとは、ひとつの国家にまとまるべきだ」という理念を掲げます。そういう人びととは「民族」ですが、それが国家の線引きの基準になるという考え方です。国民国家の始まりです。

でも、何ををもって同一の民族だとみなすのか？ 民族の基準は言語、人種、生活習慣、宗教など、いろいろありすぎるから、どれを基準にするかでその区分けが違ってくる。かりに言語を基準にしたとしても、たとえばゲルマン系の言語のどこまでをドイツ語の方言とし、どこからを非ドイツ語

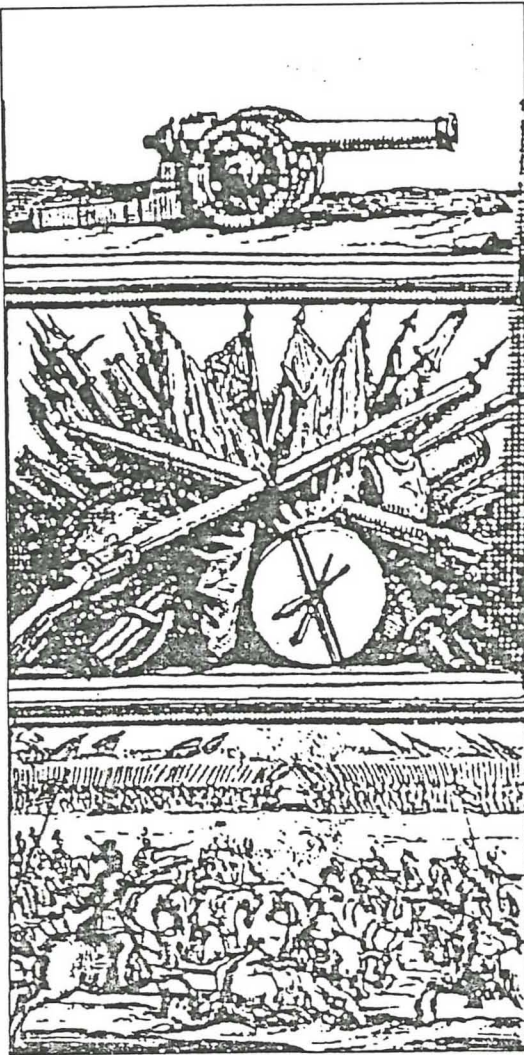
とするのか明確じゃない。それに人間は、きっちり線で区切れるように住み分けてなんていません。実際、アルザス地方なんかはフランスなのかドイツなのか、もめてしまっているんです。

国家の建て前では、そこにドイツ人と呼べるようなまとまりがあったから、それを区切って国家にしたことになっている。けれども、実態は、経済的・軍事的な理由で線引きしただけで、文化的なまとまりなどちっともなかったのに、国家の枠に入れら

れたから仕方なくドイツ民族になっただけ、とも考えられる。同じ法律、同じ制度のもとで長い間暮らしていれば、生活習慣だっ

て同じになっていくでしょう。——国民と民族がごっちゃにされてしまっているのは、そのへんに原因があったんですね。ニワトリが先か卵が先か、みたいなお話です。

橋爪 国民がいるから国家があるんだ、というの、もうイデオロギーですからね。本当かどうか怪しくても、国家としてはそ



「国民」は均質か？

——国家はそうやって、少々異なる民族でも国民の名のもとに均質化して統合できると考えたわけですね。

橋爪 ええ。特に西欧では、先ほども述べたようにローマ教会・ラテン語文化という共通の基盤があったので、国家と民族は予定調和できると考えた。実際、西欧では国民国家は比較的うまくいった。ところが他の地域では必ずしもそうでなかった。たと

えば東ヨーロッパでは教会がバラバラなんですから。

また、国家というのは、特定の地域を外部から保護して発展させるのが目的ですから、当然排他的で、戦闘的になります。すると、便宜的に引いた国境をめぐって、戦争は起こるし、経済圏を拡張するために、アジアなどのまだ国家ができていない土地を征服して植民地にする。

国民国家のせめぎあいさらされる弱小グループは対抗手段として、やっぱり国民国家をめざすしかない。たとえば国連では、一国に一票の発言権が与えられます。どんなに小さくても国家であれば、建て前上は平等に扱われる。

なぜですか？

橋爪 ヨーロッパの国民国家は、封建権力を倒すときの口実として「主権」という観念を掲げたからです。主権とは、本来は神のみが持つ全知全能の力なのですが、国家はこの権力を神から与えられた、ということにしたから、国家権力は地上における、

神聖で唯一の権力になった。これはフィクションですけど、いったんそう決めてしまった以上、他の国家の主権も尊重しないといけない。そうしないと自分の正統性も危うくなる。

帝国主義に対しては、各地で「民族自決」、つまり自分たちも国民国家を作る権利があるという主張ですが、そういう運動が起きた。それ以外に方法がなかったからです。外部の勢力に対して、一丸となって戦っているあいだ、このスローガンは有効なんです。実際には内部にいろんな集団や宗教勢力を抱えているわけだから、とても均質な「国民」にまとまれない。かといって、あまり小さなまとまりで独立国家を作ったところは、貧乏で困っている。

アメリカの成功、ソ連の失敗

橋爪 国家と民族は必ずしも予定調和しない、という前提から出発する国家もあります。

ミットするなら、建て前上はどんな民族でも、このメンバーになれる。たとえば、アメリカの委任統治を受けている太平洋の島々では、州になろうかという動きもあるし、フィリピンでは真剣に合州国に参加することを検討した時期がある。もともといろいろな民族が集まった国だから、アメリカは民族を超越している。無理に民族と国家を関連づけようとはしないんです。

だから最近は何語を英語に一元化しないでスペイン語も併用していい、という文化多元主義の運動をも許容するわけですね。ちよつとローマ帝国に似ていますね。

橋爪 そうです。アメリカ大統領のイメーヂは、ローマ皇帝に通じますね。ローマ皇帝とは、まず、民衆の代表という意味。もうひとつは、キリスト教の保護者という意味。アメリカには、市民権という考え方があり、アメリカの上院は「元老院」という名前ですよ。議事堂とかホワイトハウスとか、みんなローマ風の古典様式。凱旋門がないのが不思議なくらいです。

イデオロギーによる超国家的な人工的國家のもうひとつの例は、ソ連ですね。ソ連を統合するイデオロギーは、もちろんマルクス主義。これは、東方正教会の民族主義に対するアンチテーゼと考えられます。さきほどのべたように、東方正教会は、各民族ごとにはばらけていく宗教でした。それに対するマルクス主義は、普遍主義なのです。イスラム教のウンマとよく似ていますが、全世界がひとつの共産主義社会（一種の宗教共同体「コミュニオン」）になって、國家が消滅するのがマルクス主義の完成形態。

「インターナショナル」を歌って「万国の労働者団結せよ」と言うわけだから。

橋爪 でも國家の超尅は、結局建て前にならずに、實際のソ連は共和国の連合体とぎなくて、中途半端なものにすぎませんでした。現実には、旧ロシア帝國が支配していた民族ごとの共和国を、そのまま踏襲している。そのうえ、各共和国ごとに共産党を作った。これは、東方正教會が民族ごとに独立して

まず、アメリカがそうです。これは、普通の意味での國家よりもっと大きな國家、いうなれば超國家的國家、あるいはイデオロギー國家です。アメリカは、先住民を制圧して、白紙の状態のうえにうちたてた人工的國家だから、ヨーロッパが経験したような反封建闘争を経っていない。だから自由に國家を作れたんです。

まずはじめに、植民者の自治州がいくつもできた。州と言っただけで国ですよ。その州ごとに、議會があつて、法律があつて、軍隊がある。つぎに、それらが共同戦線を張つて、独立しようということになった。ここで、州の連合というものが生まれて、独立戦争を戦い、政治的な独立を成し上げた。そこで、州（國家）を超える國家というものを作った。これが合州國。連邦政府なわけです。

だから、アメリカの州であると名乗りをあげれば、合州國に加盟できる。アメリカ的な価値——具体的には合州國憲法、イデオロギーとしては「自由」の理念——に

いたのと同じです。

スターリンの唱えた一國社會主義というの、これと根は同じです。東欧やアジアにいくつもの社會主義國家が点在するといふのも、マルクス主義本來の理念とは正反對ですよ。で、本來なら世界革命を追求すべきなんだ、と主張したトロツキーがスターリンと対立したのでした。ユダヤ人のトロツキーは、民族主義と反りが合わなかった。

そしていよいよ、マルクス主義という絆がなくなつてしまえば、當然その背後に温存されていた民族主義による國家再編成という考え方が浮上してくるわけです。

民族獨立の動きは

歴史の退行ではない

旧ソ連では、今までロシア語を共通語にしていたウクライナとかバルト三國とかで、それぞれの言語で國民教育をやるようになっていきます。今度は内部に残つたロシア人たちが抑圧されることになりま

橋爪 結局、抑圧／被抑圧の関係が、逆転するだけということになりますね。国民国家でいこうとする限り、どうしても少数者は抑圧されてしまうんですよ。だから、国民国家という考え方に修正を加えるべき時期にきているんだけれど、国民国家に代わるアイデアはまだ出ていない。なぜかという、国民主権という考え方を否定することにつながりかねないからです。

国家主権は最初、絶対君主が独占していましたが、結局、国民が主権者になりました。国家は、市民社会を営む市民の権利／義務関係、市民であるという身分を保證する仕組みなんです。だから、権利を保證してもらうには、どこかの国家の国民にならないといけない。でも国民になると、少数者は自分のアイデンティティをあきらめなければならぬ。

どうしても少数者がアイデンティティを守りたければ、国家よりもっと大きな枠組みにコミットするという方法がある。

それはECみたいなものでしょうか。

代だった。その帰結が、民族主義であり、国境紛争であり、帝国主義であり、冷戦体制だったわけです。それも、ついに終わりました。そこで市民はつぎに、「国際社会」という新しい時代に入ろうとしているんです。いま起こっているさまざまな動きは、その巨大な地殻変動の余波みたいなものである。

国際社会が、国民国家を超えたものようなかたちで、姿をあらわしてくるか。そのカギを握っているのが、交通のあり方だと思えます。「交通」というマルクスの用語が嫌いなら、交流でもコミュニケーションでもいい。人類の交流のあり方が、どこまで深まっていくのか、ということですよ。

かつて、資本主義経済の登場によって、国民国家が生まれました。国境は、人間や物の移動をある程度制限したほうが、資本主義経済に都合がいいから作られた枠でしたよね。だから、逆に、人間や物や情報をもっとじゃんじゃん移動したほうが、誰にとっても利益になるという状況が生まれ

橋爪 ECが、国民国家を圧倒して、市民の権利をじかに保障するものになるのか、まだ判りません。でも現在のヨーロッパだったら、国民教育よりも、ECの一員であるという教育をしたほうがいだろうと思えます。それは、国民教育によって抑圧されてきた地域ごとの固有文化を再評価することと両立する。たとえば、標準ドイツ語だけじゃなくて、さまざまな方言にも対等の価値が認められるような。国家より大きな枠ができれば、そのなかにある国民国家は解体していくかもしれない。

別にマルクス史観じゃなくても、世界はひとつになることに向けて前進していく、という歴史観がありますね。違った民族が国家の名のもとに合体し、その国家がまた合体して連邦になって、また合体して世界国家に向かっていくという。たとえばユーゴは戦後社会のなかではひとつの理想だったように思います。ところが実態はうまくいなくて、結局、細かく分かれてしまった。これは歴史的には退行のような雰

ば、国民国家の基盤は大きく突き崩されていくわけです。そういう徴候が、だんだん見えてきているともいえる。

ECは、一種の超国家を作ろうという大胆な実験です。アメリカがとつきの昔にやったことを、いまごろやろうとしているようにもみえるけれど、アメリカよりずっと進んでいると考えたほうがいい。アメリカと違ってECは、国民国家を克服して、その上に作られようとする国家だからです。それは現実には、歴史の針を進めている。ECのもとでは、国家と無関係に、民族の問題を解決することが目指されています。

最後に、日本について考えてみましょう。日本は、国民国家をわざわざ作るまえから、自然条件のせいでなんとなくそういう状態になっていました。日本人は、日本に集中して住んでいて、人の出入りがあんまりない。教育とか政治的決定とかのコストを、うんと安上がりにすませられるわけです。そうやって、資本主義経済の繁栄を謳歌することができた。

囲気があります。

橋爪 退行とはいえないでしょう。国民国家でうまくいかない事例のひとつだといえるけれど。

見た目には細かい国がたくさんできているから、民族とか国家というものが非常に重要になってきているように見えるけど、本当は国家という枠組みはゆるゆるになってきているんですよ。

橋爪 独立したとはいえ、みんなECに入りがついているでしょう。それぞれの国の主権は、昔ほど強固ではないのですよ。あの小さな共和国同士がビザだ関税だとやりだしたら、互いに首の締めあいですから。つまり、「国境をそなえた排他的国家」という近代国家の最大の特徴は、もはやゆるゆるなんです。

「国民国家」が終わって

「国際社会」が始まる!?

橋爪 近代とは何だったか。それは、市民社会を国民国家というかたちで統合する時

でもこれからの時代、日本が日本でしかないことが、逆にマイナスに働きはじめるということが考えられる。日本人が日本語しか話さないことが、日本人のコストになる。日本人が日本にしか住んでいないことが、日本にとってデメリットになる。そういう局面が深刻になると、日本は日本でなくなる方向に動きだすかもしれない。日本が外に開けていくわけです。

でも、日本がそういう方向に動くのは、国際社会の数ある民族のなかでも、いちばん最後かもしれないという気がする。日本人は、自分たちが日本民族であることを、自然なことだと思っているからです。そうだとすれば、日本人ほど「民族主義」的な人びともいない、ということになるのかもしれない。国家と民族の関係のあり方という、日本はアメリカの正反対、ということになるのです。